

## 特集：ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

### 緒言

輪湖 美帆

1882年の1月からオスカー・ワイルドがアメリカ及びカナダで講演旅行を行った約11か月（内約1か月間はカナダ）の間、多くの現地メディアが彼にインタビューを行った。その中で、ワイルドのアメリカ到着後間もない1月17日の『フィラデルフィア・プレス』紙 (*Philadelphia Press*) には、興味深いやり取りが掲載されている。記者が「アメリカでの待遇に満足する理由があるのですか？」と質問すると、ワイルドは「ええ、はい、実に」と答えた後に下記のように続けている(26)。

ご存知でしょうか、[アメリカに]上陸する前の晩、私はどんな感じだろうかと考えていたのです——私に先んじて届いたにちがいない、私の間違ったイメージという不安を思い、果たして人々は私の本当の姿を知ることを待っているのだろうか。けれども詩人は非難には無関心でなくてはなりません。称賛に対してもそうでなくてはならないように。詩人は、亡くなってずっと後にならないと、非難と称賛、そのどちらにも値しないのです。死後ずっと後になって初めて、評価されるのです。生きている間は、未来のために仕事をするしかできないのです… (26, 拙訳, 角括弧引用者, “A Talk with Wilde,” *Philadelphia Press*, 17 January 1882, 2.” *Oscar Wilde in America: The Interviews*. 2010. Ed. Matthew Hofer and Gary Scharnhorst. Urbana: U of Illinois P, 2013. 25-31. Print).

ワイルドとアメリカとの関係については、これまでも研究がなされてき

## 緒言

た。特に、ウィリアム・S・ギルバートとアーサー・サリヴァンのコミック・オペラ『ペイシャンス』(*Patience, or Bunthorne's Bride* (1881)) のアメリカ公演の宣伝もかねた、ワイルドのアメリカでの講演旅行は多くの注目を集めてきた。本協会でも、2008年に開催された大会シンポジウム「ワイルドとアメリカ」において、この講演旅行は中心的なトピックとなり、刺激的な議論が展開された。具体的には、富士川義之先生が『ペイシャンス』を軸にワイルドのアメリカ講演と彼の唯美主義形成について、河内恵子先生が、アメリカ講演においてワイルドが見せた表現者／被表現者という二重性について、原田範行先生がジャーナリズムとあたかも戯れるかのようなワイルド文学の原点がアメリカ講演にあったことを、そして大石和欣先生が、ワイルドのアメリカ講演にうかがえる、彼の唯美主義とジョン・ラスキンおよびウィリアム・モリスの社会主義思想との関係について論じた<sup>1</sup>。ワイルドとアメリカとの関係については、批評界でも近年益々注目が集まっており、2010年には Matthew Hofer と Gary Scharnhorst (編) による *Oscar Wilde in America: The Interviews* (U of Illinois P)、2013年には Roy Morris Jr. による *Declaring His Genius: Oscar Wilde in North America* (Belknap-Harvard UP)、2014年には David M. Friedman による *Wilde in America: Oscar Wilde and the Invention of Modern Celebrity* (Norton) が、2018年には、ワイルドのアメリカ講演にかなりのページを割いた Michèle Mendelssohn の *Making Oscar Wilde* (Oxford UP) などが上梓されている。こうした背景に鑑みても、ワイルドとアメリカとの関係という視点は重要性を増していると言えよう。

実際、冒頭で挙げたワイルドのインタビューへの回答が示唆しているように、ワイルドとアメリカとの関係を見るということは、アメリカでの経験がワイルドに与えた影響だけでなく、ワイルドがアメリカでどのように受容されたか、当時アメリカですでに流通していたワイルドのイメージと、ワイルドが自分の「本当の姿」として伝えようとしたこととの比較、あるいは「未来のために」と思っていた仕事とは何か、そしてその後の評価、といった数々の論点をただちに想起させ、ワイルドやその同時代を分析するための重要な視座を得ることにつながると言える。そのため本企画では、ワイルドの捉えたアメリカのイメージに加えて、アメリカ側から捉えたワ

イルドのイメージや解釈、またひいてはワイルドを軸にして英米の文学や文化の双方向的な影響関係にも注目し、4つの論文からなる特集「ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド」としてまとめた。

まず拙稿（輪湖美帆）は、「カンタヴィルの幽霊」（‘The Canterville Ghost’）に登場するアメリカの少女ヴァージニアが、当時のステレオタイプ的な〈アメリカ〉と〈イギリス〉のイメージの両方を持ち合わせていることに注目し、一見対立する両国のイメージをいかにワイルドが結び付けようとしていたかを論じる。次に貞廣真紀先生は、ワイルドのエッセイや、彼がアメリカで答えたインタビュー、彼に関するアメリカの新聞記事等の膨大な資料の分析から、ワイルドとアメリカ西部との興味深い関係を考察している。宮崎かすみ先生は、現在アメリカの大学に所蔵されているワイルド関連資料から、アルフレッド・ダグラスとロバート・ロスの関係性や人物像に新たな光を当てている。原田範行先生は、ワイルドとアメリカとの関係を考える際に重要な3人の女性に注目することで、ワイルドのキャリア形成から、その死後の文学史上の位置確立に至るまで、アメリカという視座から得られる世界の奥深さを明らかにしている。

こうした試みから、ワイルドを分析する際にアメリカという視座がいかに重要であるかが改めて明らかになってくると思うが、これは言い換えればワイルドとその作品をイギリスの文脈だけでなく、環大西洋の文学・文化の文脈の中で評価し分析しなおす試みともいえる。あるいは冒頭のワイルドの言葉を借りるなら、彼が「死後ずっと後に」託した「評価」への一つの応答の試みであると言えるかもしれない。

\*本特集を構成する4本の論文は、日本ワイルド協会第46回大会（2021年12月11日）において開催されたシンポジウム「ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド」における口頭発表を基にしたものであり、本緒言もシンポジウム冒頭に行った趣旨説明の原稿に大幅な加筆・修正を施したものである。

注

- 1 詳細は『オスカー・ワイルド研究』第11号（2010年）、45-76頁（富士川「唯美主義

## 緒言

義者の二つの顔」45-52頁；河内「オスカー・ワイルドのアメリカ発見」53-60頁；原田「ワイルドとアメリカのジャーナリズム」61-66頁；大石「ある道路工事人と唯美主義者の肖像」67-76頁）参照。